

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01533

研究課題名(和文) 福祉・良き生の経済思想史的研究—マーシャル、ラスキン、福田徳三を中心に—

研究課題名(英文) Economic Thought of Welfare, Wellbeing, focusing on Alfred Marshall, John Ruskin, and Fukuda Tokuzo

研究代表者

西沢 保 (Nishizawa, Tamotsu)

帝京大学・経済学部・客員教授

研究者番号：10164550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：

Caldari准教授と進めてきたマーシャルの未刊の手稿を再構成して出版する作業が終わり、Alfred Marshall's Last Challenge. His Book on Economic Progressとして出版された。厚生経済学の歴史的再検討に関わる成果が、共編著 Welfare Theory, Public Action, and Ethical Values. Revisiting the History of Welfare Economicsとして出版された。また『福田徳三著作集』第14巻『労働権、労働全収権及労働協約』も、西沢の解題を付して出版された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Caldariとの共編著 Marshall's Last Challengeは、未刊の手稿を整理し、マーシャルの最終巻を出版したもので、マーシャルの経済思想研究にとって意義があるものと思われる。Backhouse, Baujardとの共編著 Welfare Theory, Public Action, and Ethical Valuesも、厚生経済学史の研究に新たな知見を提供し、平井俊顕との共編著『ケンブリッジ知の探訪、経済学・哲学・文芸』も広い視野を提供している。また、『福田徳三著作集』第14巻『労働権・労働全収権及労働協約』（解題：西沢保）も一定の学術的貢献をしていると思われる。

研究成果の概要(英文)：Joint work with Katia Caldari, to compile and transcribe the unpublished manuscripts on "Progress" by Alfred Marshall kept in the Marshall Archives at Cambridge, has been finished and published as "Alfred Marshall's Last Challenge: His Book on Economic Progress" from Cambridge Scholars Publishing in 2020.

Relating to our work on the historical reconsideration of welfare economics, "Welfare Theory, Public Action, and Ethical Values: Revisiting the History of Welfare Economics" has been published from Cambridge University Press.

On Fukuda, "Collected Works of Fukuda Tokuzo", vol.14, "Right to Labour, Right of the Whole Produce of Labour, and Collective Bargaining" has been published with Synopsis by Nishizawa.

研究分野：経済思想史

キーワード：厚生経済学 福祉国家 マーシャル ラスキン 福田徳三

### 1. 研究開始当初の背景

本研究では、前年度までの科学研究費(基盤研究A)「ケンブリッジ、オクスフォード、LSEの経済思想と現代福祉国家の変容」による内外の共同研究の成果を踏まえて、残された課題と成果を取りまとめ、同時に課題を新たな方向で発展・収束させて複数の個別研究成果を公表することを目標にした。新たな方向とは、効用よりも徳・卓越の倫理、人間の性格・能力の発展を軸にした「福祉の経済思想史」の構築であり、科研費とは別途進めてきた福田徳三の経済思想史研究が含まれる。

本研究は、厚生経済学というよりも福祉の経済学、人の良き生を追究した経済思想の歴史的再構成を目指す。ラスキン、マーシャルからケインズの時代について、科学としての経済学を求めなかで軽視されてきた、効用よりも徳・卓越の倫理、人間の性格・能力、芸術の側面を軸に、ラスキン、マーシャル、ピグー、ホブソン、ケインズの経済思想を再検討し、併せて福田徳三の厚生経済研究を考察して、それらの現代性を追究する。「生こそ富」というラスキンの思想とそれを展開したホブソン、「生を厚くする」厚生経済を追究した福田徳三、そして、経済学を「日々の生活を営む人間の研究」、「人間生活の改良の道具」だとしたマーシャル、ピグー、手段よりも目的、効用よりも内的善を追求する世界を展望したケインズを中心に、この時代の福祉の経済思想を歴史的に再構成したい、というのが本研究開始当初の状況であった。

### 2. 研究の目的

本研究の大きな課題・目標の一つは、「厚生経済学(福祉の経済学)の歴史的再検討・再構成」であり、国際ワークショップの成果を踏まえて、イギリスの研究協力者 Backhouse 教授、フランスの研究協力者 Baujard 教授と西沢の共同編集で、英語の本の出版準備を具体的に進めることであった。その本の第一部は、ラスキン、ホブソン、マーシャル、ピグー、パレートを中心にし、第二部は、ロビンズ以降の科学的な新厚生経済学の時代の経済思想を非厚生主義的・非帰結主義的な側面から再検討し、アマルティア・センの福祉の経済学(潜在能力理論)にいたる方向である。それまでの国際共同研究の成果の公表であり、まとめて英文書で出版することが、本研究の最初の大きな目的であった。それは、非功利主義的、非厚生主義的、非帰結主義的な側面を中心に、ラスキン、マーシャルからセンにいたる福祉の経済学・厚生経済学の歴史を再構成しようとするもので、新たな知見を提供する学術的貢献になるものと思われる。

西沢は、イタリアの研究協力者 Caldari 准教授と、マーシャルが最後に書こうとして完成できなかった“Progress”に関わる未完の手稿類(ケンブリッジ大学マーシャル図書館所蔵)を翻刻、整理し、注釈を付して出版する計画を進めてきた。三部構成からなるこの未完の最終巻に関わる二人の共同作業は、西沢の在外研究、Caldari 准教授の招聘等を通して進められ、*European Journal of the History of Economic Thought* (on line, 21 Feb. 2014)等に共同論文を発表してきた。“Progress”に関わる未完の手稿類の出版は、マーシャルの経済思想研究の進展に大きな意味があるもので、早い機会に出版にこぎ着けることを目標にした。注釈を付すためにロンドン、ケンブリッジでの調査をさらに行い、Marco Dardi 教授らとの討論も進め、この未完の最終巻を出版することが、本研究の二つ目の大きな目的である。

また、研究協力者・藤井賢治教授とマーシャル『経済学原理』の翻訳の作業を進め、研究期間内に翻訳完成のめどをつけることも大きな目標である。

### 3. 研究の方法

以上のことを踏まえて、西沢は、ラスキンの「生こそ富」、ホブソンの「人間的価値基準」、「富と生」を中心に研究を進め、J.S.ミルの定常状態観を見直して、経済の成長と人・社会の進歩を軸に、ケインズの「我が孫たちの経済的可能性」等における将来展望までを視野に入れて、富・経済と福祉・良き生の経済思想史を再構成し、いずれ本にまとめることを考えたい。これは、福祉の経済学の歴史的再構成であり、経済的厚生を超える富と福祉・幸福のあり方について、都留重人や塩野谷祐一教授が構想していたことにつながるものと思われる。“Welfare and ‘organic life-growth’: Economic and moral well-being”という考え方を軸にしてマーシャルの有機的成長論を再検討・再構成していきたい。本研究では、効用よりも徳の倫理、人間の性格形成・能力、芸術という側面を再検証し(これは塩野谷祐一『ロマン主義の経済思想』2012年、等に依拠している)富と生、富と人、経済と倫理を有機的・統合的に構想する経済思想を、マーシャルを中心に、ミルの定常状態観からケインズの将来展望までを視野に入れて歴史的に再構成し、いず

れ本にして公表したいと考えている。

心理学・倫理学から始めて、物的富・経済的福祉とともに人格・能力・徳の成長(“Economic and moral well-being”)を考えるマーシャルの経済思想を中心に、経済学と倫理・哲学が有機的、統合的に構想され、真の福祉・well-beingが追究されている経済思想をマーシャル、ラスキンからピグー、ホブソンそしてケインズまでを視野に入れて再検証し、新たな知見を提供したい。経済学(厚生経済学)を科学として追究し、価値判断・倫理学を切り離す方向で経済学の歴史が進んできたなかで、Goodwin 教授のケインズにおける道德哲学、芸術の研究、ケインズとロジャー・フライの知的な関係、塩野谷教授が言う「資源の有徳的利用」の経済思想は軽視されてきた。効用・資源配分の効率性、正義・資源の公正な分配とともに、徳の倫理にもとづく「資源の有徳的利用」(これはマーシャルの「富の使用における騎士道」につながるであろう)を経済思想の一つの軸にして、マーシャル、ラスキンからケインズにいたる福祉の経済思想史を再構成することを目指したい。この作業には、これまでの共同研究で協力・協働関係を構築してきた内外の研究協力者の協力を得たいと考えている。

日本の経済学の先駆者である福田徳三の厚生経済・社会政策を中心とする経済思想は、マーシャル、ピグー、ホブソンの経済思想と深い関りがあった。福田の経済学は、一方の足をプレンターノに他方をマーシャルに置いていたというが、最後の立脚点は倫理的な意味合いの厚生経済学であり、その大きな拠り所は、『仕事と富』(1912年)、『富と生』(1929年)等を書いたホブソンであった。福田徳三の厚生経済・社会政策研究をグローバルな知性史のなかに位置づけることが、本研究の第三の大きな目標である。プレンターノ、マーシャル、ホブソン、福田というような社会厚生思想の国際的伝播、そういうことの解明を通してマーシャルを中心とする新古典派・正統派経済学の歴史を見直す作業を進めたい。西沢は Backhouse 教授との共編著 *No Wealth But Life. Welfare Economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945*, Cambridge University Press, 2010 で、塩野谷教授のオックスフォード・アプローチ、Backhouse 教授の「厚生経済学者としてのホブソン」の後の章で福田論を書いた。また、“Economics of Social Reform across Borders. Fukuda’s Welfare Economic Studies in International Perspective”( *Journal of Global History*, 2014) も同様の試みである。研究協力者の井上琢智教授を始め、池田幸弘、武藤秀太郎両教授ら福田徳三研究会のメンバーの協力を得て、グローバルな知性史のなかで福田の経済思想を考究し成果を公表したい。そういう福田の経済思想の研究を通して、それと同時代のイギリスの福祉の経済思想を再構成する作業の一助にしたい。西沢は、日本の経済思想のシリーズ『評伝 福田徳三』(日本経済評論社)を刊行予定であり、またすでに刊行が進んでいる『福田徳三著作集』(信山社)についても作業を推進する。西沢の「解題 福田徳三とマーシャル」を付した『福田徳三著作集』第1巻『経済学講義』が近刊予定である。

#### 4. 研究成果

まず、厚生経済学・福祉の経済学の歴史的再検討については、*Welfare Theory, Public action and Ethical Values. Revisiting the History of welfare Economics*, edited by Roger E. Backhouse, Antoinette Baujard and Tamotsu Nishizawa, Cambridge University Press, pp.ix+338 が、2021年3月に出版された。3人の編者による序文「厚生経済学史再訪」に始まり、第一部は、塩野谷教授の長いラスキン論文、ホブソン、西沢の“Alfred Marshall on Progress and Human Wellbeing”、ピグー、ワルラス、パレート論となっている。第二部は、ヒックスの非厚生主義宣言に関わる鈴木論文、サムエルソン、コースの定理と環境、マスグレーブ、アロウ、そしてセンの潜在能力理論、および正義・不正義の問題へのセンの非厚生主義的接近を検証している。

次に、マーシャルの手稿を整理し、未完の最終巻を再構成する Caldari 准教授との共同作業も2020年に出版された。*Alfred Marshall’s Last Challenge. His Book on Economic Progress*, edited and introduced by Katia Caldari and Tamotsu Nishizawa, Cambridge Scholars Publishing, 2020. pp.xiv+424.

三部からなり、それぞれに我々の序文が付されている。Book I General Tendencies of Economic Progress, Book II Functions and Resources of Government Regarding Economic Progress, Book III Possibilities of Economic Future. 一定の評価と読者も得たようであり、すでに Paperback ed. が出版されたということである。

また、マーシャル『経済学原理』の翻訳作業も進み、2022年度末には翻訳作業をほぼ終えていた。2023年4月末に最初の翻訳稿を出版社に送っている(岩波文庫になる予定である)。

福田徳三研究については、『福田徳三著作集』(信山社)が2015年から出始め、22年度までに11冊が刊行されている。西沢は、第10巻『社会政策と階級闘争』(2015年)第1巻『経済学講義』2017年、第14巻『労働権、労働全収権及労働協約』2021年、に比較的長い解題を書い

ている。

また、日本の経済思想シリーズの西沢著『評伝 福田徳三 - 経済学の黎明と展開』(日本経済評論社)も2022年度末には大体の作業を終えていた。本書は、2023年5月初めに出版された。

平井俊顕教授との共編著『ケンブリッジ 知の探訪 - 経済学・哲学・文芸』ミネルヴァ書房、2018年

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西沢 保	4. 巻 12
2. 論文標題 ILOの創設と日本の対応, 福田徳三	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会政策	6. 最初と最後の頁 19~31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24533/spls.12.2_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 西沢 保	4. 巻 73巻3号
2. 論文標題 「国際労働保護法制、ILOと福田徳三」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教経済学研究	6. 最初と最後の頁 79-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 西沢保	4. 巻 -
2. 論文標題 マーシャルの経済思想 - 「進歩」と福祉・幸福の追究 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西沢保・平井俊顕編著『ケンブリッジ 知の探訪 - 経済学・哲学・文芸 - 』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 53-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西沢保・平井俊顕	4. 巻 -
2. 論文標題 序章：ケンブリッジ 知の探訪	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西沢保・平井俊顕編著『ケンブリッジ 知の探訪 - 経済学・哲学・文芸 - 』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katia Caldari and Tamotsu Nishizawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Economic, ethical and political aspects of wellbeing: some Marshallian insights from his book on Progress	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 M. Dardi, S. Medema and K. Caldari eds., Marshall and the Marshallian Heritage: Essays on Honour of Tiziano Raffaelli, Palgrave Macmillan	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Tamotsu Nishizawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Alfred Marshall on Progress and Human Wellbeing	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Roger E. Backhouse, Antoinette Baujard and Tamotsu Nishizawa eds., Welfare Theory, Public Action, CambridgeUniversity Press	6. 最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西沢保	4. 巻 14
2. 論文標題 解題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西沢保編『福田徳三著作集』第14巻『労働権・労働全収権及労働協約』信山社	6. 最初と最後の頁 259-320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 西沢保
2. 発表標題 「マーシャルと福田徳三ー厚生経済をめぐって」
3. 学会等名 北海道大学経済学研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 T. Nishizawa and T. Abe
2. 発表標題 "Late-comer Japan's Reaction to the International Labour Meeting in 1919 and After"
3. 学会等名 Coloqne International 'Social Justice and Decent Work: The ILO in Action in the Last Century' (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西沢 保
2. 発表標題 「ILOの創設と日本の対応、福田徳三」
3. 学会等名 社会政策学会、法政大学 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 西沢保	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 248
3. 書名 評伝・日本の経済思想 13 『福田徳三 経済学の黎明と展開』	

1. 著者名 Roger Backhouse, Antoinette Baujard, Tamotsu Nishizawa	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 300
3. 書名 Welfare Theory, Public Action and Ethical Values. Revisiting the History of Welfare Economics	

1. 著者名 西沢保 編集	4. 発行年 2021年
2. 出版社 信山社	5. 総ページ数 356
3. 書名 『福田徳三著作集』第14巻『労働権・労働全収権及労働協約』	

1. 著者名 Katia Caldari, Tamotsu Nishizawa	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Cambridge Scholars Publishing	5. 総ページ数 438
3. 書名 Alfred Marshall's Last Challenge	

1. 著者名 西沢保・平井俊顕編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 394
3. 書名 ケンブリッジ 知の探訪 - 経済学・哲学・文芸 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------



イタリア	University of Padova			
英国	University of Birmingham			
フランス	University of Jean Monnet			